

執筆基準（日本語原稿用）

表題などの表記方法

- 共著の場合は、筆頭執筆者から順に横並びに連名とする。
- キーワードは「、」で並べる。(5語以内)

(例)

中国大学・学院日本語教師研修における「課題研究」について

木山登茂子・高偉建・篠崎摂子

[キーワード] 中国人日本語教師、課題研究、自主的活動、機関訪問、日本理解

参考文献の記述方法

- 本文中での参考文献の記述方法：
文献全体を示す場合...著者の姓（出版年）
(例) ネウストプニー（1979）
文献の一部を示す場合...著者の姓（出版年：該当文のページ）
(例) ネウストプニー（1979: 18）
記述の内容が参考文献に拠ることを示す場合（著者の姓（出版年：該当文献のページ））
(例) （ネウストプニー1979: 18）
- 論文末尾の参考文献リストの記述方法：
 - 記述されている言語によって、大きく分類し、まず、和文の参考文献を著者名あるいは編者名のあいうえお順に、続いて他の言語による文献を並べる。英語などローマ字の場合は、姓のアルファベット順、中国語、韓国語などの文献は執筆者の判断に従って、順番を定める。
 - 同じ著者名が続く場合は、2行目以降は繰り返さずに、「——」を用いる。
 - 引用文献の中に、同じ年に、同じ著者により発行されたものがある場合は、年号の後に a や b をつけて、(2000a) (2000b) のように表記する。
 - 和文文献の場合は、原則として次の記載方法による。1) 氏名（姓・名）、2) 刊行・発表年、3) 論文名、4) 書名または雑誌名、5) 頁、6) 発行機関の順とする。
(例) ネウストプニー, J.V. (1979) 「言語行動のモデル」、南不二男編『言語と行動』講座言語第3巻、大修館書店
南不二男 (1981) 「言葉のタブー」『講座日本語学9』、43-64、明治書院
—— (1987) 『敬語』 岩波新書
水谷信子 (1989) 「待遇表現指導の方法」『日本語教育』69号、24-35
 - ウェブページを参考文献として掲載する場合には、URL (< >で囲む) 及び参照した日付を記載する。
(例) 国際交流基金「日本語教育国・地域別情報《英国》」
< <http://www.jpf.go.jp/j/japanese/survey/country/2011/uk.html> > 2011年12月1日参照

図表（図版・罫表）

- 図表には、それぞれの通し番号を付し、必ず、表題をつける。
- 図表を本文中に挿入する場合は、本文中に適当なスペースをとり、図表を入れ込んだ状態の原稿を作成する。図表を稿末資料とする場合、適当なサイズなものを貼り付ける。
- 図表は鮮明なものであること。なお、投稿時の原稿サイズは A4 版であるが、印刷物は B5 版となるので、印刷時の縮小率を十分考慮し、図表が小さすぎたり、不鮮明にならないよう留意する。

- 図表を他の出版物から転載する場合は、必ず事前に当該図書の出版社から転載許可をとりつけておく。また、その図表の下に、当該図書の著者／出版年／書名／出版社名を表記する。

その他の表記

- ルビ 原則として上につける。ただし、引用部分はその限りではない。
- 引用文 引用であることがわかるように表現する。注などを用いるか、文中に()などで出典を表すかは、執筆者の判断に任せる。引用に手を加えた場合は、その旨明記する。
- 外国人の姓名 論文中に姓名をカタカナで表記する際は、「・」を姓と名の間にに入れる。姓と名の順番は原則として慣用に従う。
- 句読点 「、」と「。」を用いる。和文の中では、「.」や「,」は用いない
- かぎかっこ 書名及び雑誌名は「『-』」、論文名は「「-」」を用いる。
- 注記 注記は、文末注とする。該当箇所の後ろの右上に「⁽¹⁾」のように入る。文末に記す場合は、句読点の後に「。⁽¹⁾」のように入る。
- 年月日 特に指定しない。年度についても、西暦を用いるも元号を用いるも可。

その他（論文原稿の書式、原稿執筆時のフォント・文字サイズ、ページ設定）

- 原稿執筆時のフォントについては、原則として、日本語は MS 明朝、英語／ローマ字は Times New Roman を使用する。文字サイズは 12 ポイントを基本とし、表題・キーワード・要旨・見出し・注記・参考文献はサイズを適宜変更する。（※なお、掲載論文については、印刷原稿の入稿後、編集が行われるため、フォント、文字サイズなどの変更がありうる。）
- ページ設定について、A4 版・横書き、文字数 42 字×行数 33 行とする。